

秋田県
退職校長会

会報

題字 秋田師山 書

第 98 号

秋田市手形学園町1-1
秋田大学教育文化学部
同窓会旭水會 内

令和4年3月25日 発行

秋田県退職校長会



「コロナが船でやってきた」

秋田県退職校長会副会長 佐藤 朋夫

中国武漢市の患者から新種のコロナウイルスが見つかったとのニュースが伝わったが、当初はあまり気にもしなかった。日本では二〇二〇年の一月に初の感染者が確認され、二月には横浜港に停泊中のクルーズ船から集団感染が発生し、その後感染者が増え続けることになった。

この二年間は、会という会の活動は休止あるいは延期と何とも手応えのない状況が続いた。厄介なコロナウイルスに振りまわされながらの日々を過ごし三年目を迎えている。

そして周りには、ワクチン、デルタ株、クラスター、アストラゼネカ、モデルナ、ファイザー、さらにオミクロン株と今まで聞き慣れない用語が、テレビや新聞を通して洪水のように入ってきた。ただ「国産ワクチン完成、来月から接種開始」のニュースは聞くことができず、今でも残念に思っている。

近所の知り合いの子が高校三年の卒業式を迎える頃コロナの感染拡大が始まった。卒業式も今までにない人数制限の中で行われ、その後大学に合格しても自宅待機を余儀なくされ、この後どうなることかと心配しながら過ごしたとのことである。

そのうち直接会ったことのない先生とのオンライン授業が始まることになったが、本人はあまりなじめなかったようで「わからない、質問もできない」と戸惑

いが多かったという。コロナ感染が拡大する中では、自宅かアパートに缶詰め状態が続く、少ない情報しかなかったが、親がコロナのため失業したり、本人もバイト収入をあてにして入学したのにその道を閉ざされ大学をやめた学生のいたことを知ったりしたようだ。

混乱のスタートとなったが健闘を祈るのみである。

さて、このコロナが始まってから感染予防策がマスク、手洗い、うがい、後で三密が加わったのだがこれさえ守っていれば感染しないという気持ちがあるがどこかにあったように思う。今は小・中学生はじめどの年代にも広がりを見せているのは気がかりなことである。

また、マスクに関してだが、乳幼児を持つ母親が「子どもがマスクを外したほかの人を見て泣き出すことがあり心配だ。」という話をしてくれた。一、三歳の子にはどのように見えているのだろうか。特に乳幼児や小学校低学年の発達を考えたとき、ことばの獲得、話す聞く、対人関係、愛着行動の形成などについて何らかの影響がないだろうかと気になってくる。

それに、これから学校に導入されるであろうパソコン、タブレット等を使った授業も盛んになると思われるが、学年段階、成長過程に合わせ、信頼関係や安心感の伴った場で進めていってほしいと願っている。

「船でやってきたコロナ」がどのような形になるか不明だが収束の速度をあげてほしいものである。

昨今の世情を見ると、格差が広がり、生きることがままならない人々が増えていることは間違いない。若者から壮年にいたる多くの世代で非正規雇用が拡大し、困窮が長引き明るい将来を見通せない状況が続いている。

かつて、自分が学生であった頃を思い起こすと、安アパートに住まいして、カップラーメンをすすっていたいわゆる「貧乏学生」であった。しかし、当時未来が閉ざされているという感覚はなかった。世間一般でも、手に職を付けてコツコツと一生懸命に働けば、やがては、世間並みの生活ができるだろうという暗黙の了解があったように思う。

一九七〇年公開の映画「男はつらいよ」シリーズ第五話「望郷編」は、フーテンの寅が一念発起し、額に汗して油まみれになって働くことを目指すが、思うにままならない滑稽さを描いた作品である。この中で、妹のさくらがお兄ちゃんの寅に、「地道に働くっていうことは尊いことなのよ。」と諭す場面がある。これはまさに、日々真面目に努力を積み重ねれば、きっと道が開けることに誰もが疑いを持たなかった時代の象徴でもあると思う。

今日の閉塞した社会を打破できるのは、やはり政治の力であるが、ふとあることに気がついた。国を先頭になって引っ張っている政

ひつうと



秋田県退職校長会
常任理事 伊藤 栄二

「フーテンの寅」と妹さくらに思う

政治家、そしてそれを選んでいる私たち一般国民、その誰もが通っている道があるではないか、それは学校、そしてそこで受けた学校教育である。

教育基本法の前文には、「個人の尊厳を重んじ、真理と正義を希求し（中略）新しい文化の創造を目指す教育を推進する」という崇高な文言がある。その重みを受けたまま、きわめて平易に言えば、少なくとも、個人の尊厳が重んじられる社会とは、明るい未来を信じて生きていける日常があるということだと思うのである。

政治家を含めた国民全体が、学校教育で何を学び、それをどう実現しようとしているのか、それが根本にあるのである。私たちが

は、教員・校長としてその学校教育に長年大きく関わってきた。現役を退いた今となっては、直接できることはないが、現職の先生方との交流などを通して、教育の重みを今一度一緒に考えていくことはできるのではないかとと思う次第である。



県事務局だより

事務局長 米澤 喜彦

今年度実施（延期・中止）した事業

- | | |
|--------|---|
| 4・15 | 令和二年度監査 協同大町ビル |
| 5・6 | 県理事会・総会 書面決議 |
| 6・2・3 | 全連退理事会・総会（東京） |
| 7・10 | 郡市会長・事務局長合同の会 中止（書面開催） |
| 7・30 | 全連退会報第220号、県会報97号発送 書面による情報交換 |
| 9・3 | 鹿角退職校長会教育懇談会 中止 |
| 9・24 | 横手退職校長会教育懇談会 中止 |
| 9・27 | 全連退理事会（東京） 中止 |
| 10・1 | 全連退会報第221号・全連退情報第174号発送 |
| 10・5・6 | 第48回東北地区退職校長会協議会（盛岡市） 延期 |
| 10・15 | 男鹿退職校長会教育懇談会 |
| 10・23 | 第42回秋田県秋季研修大会 |
| 11・1 | あきた教育の日（関係各所へお願いの葉書とポスターの送付） 再延期 |
| 12・4 | 賀詞および全連退情報第175号を各郡市事務局へ発送 |
| 3・25 | 全連退会報第222号、県会報第98号、全連退年間紀要発送 |

※他に全連退からの調査報告等を行う。

郡市だより

Ⅱ鹿角だよりⅡ

今年度のあゆみ

事務局長 吉田 啓一

○第一回理事会開催 令和三年四月二十一日

・総会の開催を検討したが、コロナ感染拡大により開催困難と判断、中止とした。

・会員には、昨年同様に付議事項の認定について書面による表決を依頼した。

・年間事業の実施については、感染状況の推移を見ながら検討することにした。

○総会中止の通知発送 同 四月二十七日

○第二回理事会開催 同 六月一日

・表決では、七十一名中六十二名から回答が寄せられ、全員の賛同をいただいた。

・県退職校長会の文書・総会資料等の報告
○総会成立の通知と会費納付の依頼状発送

同 六月 四日

○第三回理事会 同 八月二十三日

・教育懇談会・野外研修会の開催を検討、感染防止のため中止を決定した。

・県退職校長会からの情報交換資料の報告

○事業中止の通知発送 同 八月二十九日

○米寿を迎えた方々のお宅を訪問し、会長より賀詞を手交する。 同 十二月二十四日

○第四回理事会 予定 令和四年三月二十四日

長寿のお祝いに先輩会員のお宅を訪ねた際、「開催を心待ちしている」との思いをお伺いし、一日も早いコロナ禍の収束と新年度の通常活動を願っているところである。

Ⅱ大館北秋田だよりⅡ

この一年を振り返って

事務局長 佐藤 久生

○総会（四月開催）中止

今年度も新型コロナウイルス感染症の猛威には勝てず開催を断念した。総会での議案は理事会で了承、書面による承認。会員へは総会中止案内と要項等資料を配付した。

○研修会（十一月二十七日開催予定）中止

七月理事会で検討。ワクチン接種も進み、開催できるだろうと期待感を膨らませていたが、変異株の出現、未だ感染拡大が続いている状況では安心して開催できないという結論に至り中止を決定した。研修会時贈呈の長寿者（傘寿）祝い品は役員が訪問し手交した。

○会報第十六号（十一月二十七日発行）

今年度も一堂に会する機会がなく交流ができなかったことから、年一回発行の会報には一人でも多くの会員の声を届けたいと考え、今号も『会員からの声・短信』の頁を設けた。九十三歳の名誉会員をはじめ各年代から様々な内容の原稿が寄せられた。コロナ禍の中でも健康に留意しながら楽しく生活している様子が窺える。新入会員は『退職して思うこと』と題して掲載した。他に現職から『特色ある学校経営』二校を紹介した。

二年続けて総会も研修会も中止となった。「来年こそは」との思いを強くしている。

Ⅱ能代市山本郡だよりⅡ

今年度の主な事業を振り返って

事務局長 佐藤 敬顕

昨年度に引き続き今年度も新型コロナウイルスの感染拡大を防止する観点から年度当初に計画した多くの事業を中止せざるを得なく、文書による周知や情報提供が主となった。

①総会（4月24日開催予定→中止）

事前に行われた理事会での審議をもとに決算・予算案や事業計画案等を全会員に書面にて提案したところ、すべての事項で承認となった。新入会員八名に対し歓迎の意を伝えることができず申し訳なく思っている。なお12月1日現在の会員数は名誉会員二十二名を含む百八十名で、ここ数年ほとんど増減なく推移している。

②教育懇談会（7月30日開催予定→中止）

現職校長会と共催で3年に2回行ってきた合同研修会で、講演を拝聴した後に懇親会を行う予定であったが、中止を余儀なくされた。現職校長との貴重な交流の場であり、来年度こそは開催できることを願っている。

③各種会合・会報等

正副会長・幹事会を2回、会長・幹事会を5回、理事会を1回開催し本会及び県退職校長会の現状把握に努めた。なお、世話人会は対面を止め書面で会員の近況を報告してもらった。例年通り6月には事務局だよりを、12月には会報を発行している。

〓男鹿市だより〓

総会・研修会

事務局長 浅井 繁樹

五月一日、ホテル諸井で会員のみで開催し、懇親会は前年に引き続き中止とした。コロナ感染防止のために、マスク着用や手指消毒、受付での検温と問診票記入、座席指定や換気など三密を避ける対策を講じて実施した。会員十九名が出席し、出席率は三十二%だった。

総会では、潟上・南秋田郡退職校長会解散への対応についても協議した。解散に至った理由は、潟上・南秋の会報最終号によると、会員の価値観の多様化により役員のなり手がない、総会等への参加者減少を挙げている。本会も会への出席率等を注視していかねばならない。本会への加入は、男鹿市在住以外でも会の目的に賛同する方を高校長を含めて広く受け入れているが、これからは現職の男鹿潟上南秋校長会の退職予定者全員に入会案内を送ることにした。

総会終了後の研修会は、「私たちの健康は私たちの手で」と題して、男鹿市食生活改善推進協議会会長の三浦愛子氏が講演を行った。推進員十名による食生活での減塩啓発の秋田弁による寸劇もあり、会場は終始笑いに包まれた。また、フレイル予防の実践として「口の体操」なども紹介され、出席者は身体も動かしながら楽しんだ講演であった。

〓秋田市だより〓

今年度を振り返って

事務局長 加賀美 俊一

今年度、四月に予定していた総会は、新型コロナウイルス感染状況を考慮し中止となった。代わりに理事会を開催し、事業計画や予算等を協議した。すべて書面決議となった昨年度よりは、一步前進したといえる。

十一月に予定していた現職・退職校長会教育懇談会は、新型コロナウイルス対応で多忙を極める学校現場に配慮し、二年続けて延期となった。計画していた「楽しい研修」では、中止となった研修もあったが、「陶芸体験」は実施することができた。参加者は少なかったが、それぞれ出来上がった作品に満足したようである。

そんな中で、会報は、会員の寄稿への協力や担当幹事の尽力で、年二回発行することができた。「交流の窓」コーナーで、できるだけ会員の声を掲載できるように努めている。

昨年度よりは活動できたとはいえ、新型コロナウイルスの収束の見通しが立たず、集って活動することが難しい状況が続いている。今できることは何なのか、安全対策とともに幹事会で検討していきたいと思う。

〓由利本荘・にかほだより〓

二年目のコロナ禍

事務局長 打矢 敏昭

令和三年度こそ『総会及び講演会』と『退職・現職校長交流研修会』を開催する方向で準備を進めてきたが、いずれもコロナウイルス感染拡大の波に阻まれてきた。特に四月の総会は、事前に出席状況を把握しており、二年に一度の感謝状贈呈を行う予定でもあった。長年役員を務められた会員へ、総会場で感謝の気持ちを伝えることができず、やむなく安倍武義会長と共に各ご自宅を訪問し、感謝状を贈呈した。

令和元年までの『総会及び講演会』と『退職・現職校長交流研修会』では、会終了後の懇親会も、多くの会員が楽しみにしていた。コロナ禍の状況で、今後、本会の運営をどのようにしていくのかが大きな課題である。

今年度実施できた事業は、『会報の発行(年二回)』と『学校教育活動支援状況調査(現職の小・中学校長)』であった。三月の理事会では、令和四年度の総会資料の検討と役員改選について協議する予定である。

令和四年度、九名の新会員が本会に入会する予定である。コロナ禍の状況下で、児童・生徒や職員の安全を守り、学校経営に尽力された新会員慰労と歓迎の席を設けたいと切に願っている。

Ⅱ大曲仙北だよりⅡ

この一年

事務局長 小 原 靖

前年度と同じく、大曲仙北の「玉穂会総会」は中止となりました。昨年度はぎりぎりまで様子を見ようという動きでしたが、コロナ禍も長くなって「ウイズコロナ」の様相になりました。

そうなつてくると同好会活動などの事業も対応できそうなものできないものが出てきました。密になる麻雀同好会大会は中止でしたが、グラウンドゴルフ同好会は大会を一回開催しました。ここ数年、会員が増えているのがゴルフ同好会です。年2回のコンペを「G・CUP」(GⅡ玉穂会)と称して参加者が技を競っています。

また、大曲仙北の各地区が輪番で行ってきた「研修視察」ですが、昨年度は美郷町千畑地区が担当でコロナ禍の影響で延期し、今年度はワクチン接種も進み、内容も密になる食事をなくして実施しました。千畑地区の名所旧跡を参加会員に案内してもらいました。

ここに来てオミクロン株による感染拡大が続く、全国的に大変なことになっています。この県会報が発行される頃には流行も収束してコロナ対策をしながらも総会が開催できることを祈らずにはいられません。

Ⅱ横手市だよりⅡ

「コロナ禍」の一年

事務局長 石 川 真須夫

○第一回役員会(四月十四日)

昨年に引き続き終息の気配が見えない新型コロナウイルスのまん延。五月に開催している総会の持ち方について役員会を開き満場一致で中止を決定。前年度の会務報告や決算報告、今年度の事業計画や予算案等については、書面による決議にさせていただくこととし、会員に周知することを確認。

○第二回役員会(六月十六日)

今年度は県南教育懇談会の担当地区。その懇談会を兼ねた現職校長会との「教育を語る会」の開催可否について退職校長会としての対応について協議した。

この事業も日増しにコロナ感染者が増えつつあることから中止せざるを得ないとした。

○会報編集会議(六月十六日)

年に一度の会報発行であるが、会員相互の情報交換、会員の繋がり場としても大事にしているので執筆依頼者の選定や紙面構成について協議した。

○終わりに

コロナ禍で事業らしいことは何一つ実施することが出来なかった。令和四年度は従来通りの事業を開催出来ればと願っている。

Ⅱ湯沢雄勝だよりⅡ

「コロナ禍」での「会報」制作

事務局長 滑 川 道 彦

今年もコロナ禍のため、総会は書面決議となり、楽しみにしていた新会員歓迎会、親睦レクリエーション、現職との合同研修会も中止となりました。結果として今年度の事業は「会報」だけとなり、例年の形式で制作することになりました。しかし、写真入りで掲載してきた記事の部分が無くなるので、短信の集まり具合を見て編集委員が構成を検討することになりました。

会報「萌友」の中心は「会員からの短信」です。近況報告や趣味の紹介など1000字程度で自由に寄稿してもらっており、会員が最も楽しみにしているコーナーです。今年度は短信が多く集まるだろうと期待していましたが、巣ごもりの影響か例年よりも少なかったのは残念でした。紙面構成を検討した際、イラストを挿入することや特別寄稿の欄を設けることが提案されました。また、表紙を飾る写真は今回特別にカラーで印刷することになりました。編集委員は最後の校正の時だけ集まるようにし、連絡はできるだけメールでやりとりをしました。

寄稿してくださった会員や写真やイラストを提供してくださった会員の皆様に心から感謝申し上げます。

【特別企画】

これからの学校教育を考える

「学校教育におけるICTを活用した取組について」

新型コロナウイルス感染拡大が続く中、ICT(情報通信技術)を活用した教育が注目されています。

子どもたちは、スマートフォンやゲーム機などを通して、日常の生活の様々な場面でICTを用いるなど、情報環境が大きな変化を見せており、情報や情報手段を主体的に選択し活用していく力を身に付けることが重要となってきました。

学校では、1人につき1台のパソコンやタブレットPCが配備され、授業でICTを効果的に活用し、指導方法の改善を図りながら児童生徒の学力向上につなげていこうとしています。

教育現場を離れた私たち退職校長会会員にとって、子どもたちがタブレットPCやデジタル教科書を活用した学習は、現職時代には経験することができなかったことです。

今後、学校教育の場でどのようにICTが活用され、児童生徒の学力向上にどう生かされていくのか、教育の専門家や現職校長の方々からのお考えを伺いたいと思い、本企画に取り組みました。

【特別寄稿】

教育のICT化は
子どもたちの未来のために

秋田大学教育文化学部教授

林 良雄



日本が直面する喫緊の課題「Society5.0」への対応のため、教育用コンピュータの一人一台環境をすすめるGIGAスクール構想が令和元年から始まり、コロナ感染症の流行をきっかけに、あつというまに、令和二年度に小中学校で一人一台の環境が整備されました。令和三年度はネットワークや機器のトラブル等の環境整備等の問題を抱えつつ、より良いものにするための各所の努力が行われています。このような状況は、おそらく二、三年程度で安定すると思います。

しかし、本当に使えるものにするための、もっと深刻な問題としては人の問題だと思えます。それは教師を支える人的措置（ICT支援員）がまだ貧弱であるということです。これまで色々なICTを活用する授業を見てきましたが、教師一人だと様々なトラブルへの対応に追われて授業時間が少なくなってしまう。それを言訳として、授業での活用をしないということになります。実は10年前から一人一台の環境を整えている八峰町では当初から学校に一人支援員を配置していました。その支援を受けて、多くの授業での活

用が進んだ上に、更に教員のやりたいことを支援員に相談することもできるようになりました。

このGIGAスクール構想でもICT支援員を四校に一人分の地方財政措置がされています。でも、四校に一人では一週間に一度回ってくるかどうかという感じになるでしょう。勿論、無いよりましとは思いますが、トラブルへの不安が払拭できないでしょうし、相談するものなかなか難しいのではないのでしょうか。

また、支援員の質も問題となるかもしれません。現在各自自治体で配置している人材はIT関係の経験者が中心だと思います。トラブル対応の際には心強いのですが、今後、その人たちが教育を理解し、教師の様々なアイディアを実現するパートナーとなれば、授業力のある教師がICTを活用したより効果的な授業を行えるのではないかと思います。

さて、財政的、人的に大きな負担を伴う教育のICT化はどのような効果があるのでしょうか。私の考えを述べてみたいと思います。

まず、教師への効果です。それまでできなかった授業ができるようになるということが挙げられます。資料を拡大、縮小するだけではなく、写真や動画を使ったり、遠隔で学外の方と話すなど、多様な授業形態ができるはずです。黒板と紙に加えて、ICTという道具を使うことができるので、選択肢が増えるわけです。教師がそれらの機能の長所と短所

を見極めて使えば、効果が上がるでしょう。このためには教師は研究が必要です。これができるのは実はベテランの教師なのです。オタク的な教師では、コンピュータを使うことが目的となつてしまい、自分にだけしかできない授業になり、教育的効果やその波及については二の次になりやすいようです。

次に子どもたちに対する効果についてです。それは学力向上でしょうか。勿論、ICTを使った方が知識の定着度が上がった、テストの成績が上がったなどの実践研究の報告はありますが、インパクトがあるほどではない気がします。これまでの知識を問う学力であれば、現状の黒板とノートの授業の方が、はるかに効率的でしょう。そうではなく、情報活用能力が身につく、ということです。

情報の内容を把握、判断するためには基本的知識は必要なのは当然ですが、知識ベースの教育だけでは、将来を担う子どもたちにとって必要な情報活用能力が身につかないでしょう。ここでいう情報活用能力とは単にワープロが使える、表計算が使えるなどというコンピュータの利用能力ではありません。

2018年度のOECD生徒の学習到達度調査(PISA)結果では、全体として参加国の上位ではありましたが、数学的リテラシー(1位)、科学的リテラシー(2位)に比べて読解力が11位と低い結果となりました。ここでの読解力とは「自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、社会に参加するために、テキストを理解し、利用し、

評価し、熟考し、これに取り組むこと」となっています。このテキストはWebサイト、投稿文などのデジタルテキストを踏まえています。実際、このテスト自体がCBTつまりWebでおこなわれています(国の学力・学習状況調査も2024年度からCBTへ順次移行することになります)。テストでは、コンピュータの画面にいくつかのウィンドウを出し、それぞれを見ながら評価し、総合していく必要があります。世界レベルで求められている能力は、デジタルテキストを読み取り、それを批判的に読み解く力なのです。加えて、コンピュータを使ってシミュレーションしながら答えるというような問題も出ています。思考ツールとしても使っていくことが求められています。

ところが、PISAのアンケート調査では教室の授業でデジタル機器を使う時間は日本が調査国中最下位に近い状況です。これではデジタルテキストを読んで作業するような能力は育たないといえます。「情報活用能力」はコンピュータなしでも身につく、と言われる方もいらつしやいますが、今や、『コンピュータとネットワーク』を活用して情報を収集、判断、総合することが「情報活用能力」なので、デジタル機器を使うことが必須なのです。

いわゆるZ世代の子どもたちにとって情報端末としてスマホを使っているので、情報活用能力があるのではないか、と思われそうですが、残念ながらその使い方は受け身でしかありません。

調査によると12歳でも6割の子どもが自分専用のスマホを持っていてインターネット(ほとんどはスマホでしょう)の利用時間の平均は170分近くです。しかし、その時間の多くは動画視聴かゲームで受動的にしか利用していません。スマホの所持は情報活用能力ということではないのです。

この情報活用能力の育成には、教師がファシリテーターに徹しながら子どもたちに自らデータ収集から処理してコンテンツ作成までを通して行わせる必要があります。この過程で、このデータは間違っていないだろうか、どのように表現すればわかりやすくなるだろうかということを考えることで初めて情報を批判的に読み解き、扱うことができるようになるでしょう。このようなことを組み込んだ授業への転換がなければ、ICTを取り入れる意味はないと思いますし、その環境がこのGIGAスクール構想で実現されたわけですから。

教育のICT化は単なる教具としてのICTの活用だけではなく、未来の秋田や日本を背負う子どもたちが活躍するのに必要な能力を身につけさせるような教育への転換を意味しています。秋田の優秀な教師であれば、このことを理解していただけたと思います。そこにこの会の皆さんに豊富な経験でサポートしていただき、子どもたちの未来を作る『新しい秋田型アクティブラーニング』を創造していただくというのが私の願いです。

【特別寄稿】

「教育界のICT元年」における
学校の取組状況とICT活用のこれから

秋田県教育庁義務教育課

一 教育界のICT元年を迎えて

令和三年度は、まさしく「教育界のICT元年」と言える年でした。その中で、ICTの活用が順調に進んだ地域や学校がある一方で、思うように進まなかったという声も聞かれました。これには様々な要因が考えられますが、一つには、GIGAスクール構想の実施が一年前倒しになったことで、ICT導入についての理解や準備が十分に行えなかったことにあつたのではないかと考えています。まずは、これからの持続可能な社会の創り手となる児童生徒にとって、様々な問題解決の手段としてICTを活用することは不可欠であるという大前提を理解することから、GIGAスクール構想の実現に向けた取組を推進する必要がありますのではないのでしょうか。

県教育庁義務教育課では、ICTの効果的な活用の在り方を検証するため、県内の小・中学校六校をモデル校にした「ICTを活用した授業改善支援事業」を立ち上げ、その成果を各学校のICT活用の取組に役立ててもらうこととしています。本稿では、モデル校や先進的な取組をしている学校の取組からI

CT活用を推進するポイントと、活用の先にあるものについて述べたいと思います。

二 ICTの活用を全校体制で進めるためにモデル校や先進校では、ICT活用を全校体制で進めるために、次のような取組を工夫しています。

(1) 「まず使ってみる」

普段の授業だけでなく、健康観察やアンケート調査を端末を使って実施するなど、日常的な場面での積極的な活用を推奨しています。それによってICT活用への教員の不安が解消されていったという意見が聞かれました。「失敗しても構わないから、まずは使ってみよう」と呼びかける校長先生のリーダーシップは、ICT活用の推進に欠かせない要素と言えるでしょう。

(2) 学習支援ソフトを効果的に使う

端末の機能や学習支援ソフトを効果的に組み合わせる使っています。例えば、サムネール機能を使うことで、教師は子どもたちの考え方や解答状況を一瞬で把握できます。また、それを基にグループ分けしたり、机間指導をピンポイントで行ったりするなど、指導効率が格段に高まることが報告されています。

(3) 校内研究体制を工夫する

ICTの活用を全校体制で推進するため、校内研究体制を整備しています。若手教員のICT活用力とベテランの先生方の授業力とをミックスして、ICTを活用した授業づくりをチャレンジしています。また、生徒会にICT委員会を組織して、子どもたち自らが端末の使い方を考え、全校に提唱してい

る中学校もあります。ここでも校長先生による柔軟な組織マネジメントの発想が光っています。

三 ICTを活用した授業づくりの先へ

本県の学校がICTの活用を推進する上で、秋田の探究型授業というアドバンテージを有効に活用し、普段の授業の中にICTを馴染ませていくことが、結果的には児童生徒のICT活用能力の向上と問題解決能力の育成の両面で成果に結び付いていくと考えます。そして、その次のステップとして、ICTを使った、より探究的な単元・授業構想が求められてくると考えています。なぜなら、ICTの活用により、新しい問題発見の方法や解決の方法などが見いだされ、それらはさらに個別化・複線化していきます。また、問題解決における話し合い場面も、学級の枠を超え、地域や県内外、さらには海外の人たちとの協働的な学びも可能になっていくからです。

一人一台端末は、学びに必要な「文房具」と言われますが、使い方次第では、これまでの授業構想をはるかに超えていくコミュニケーションツールにも、思考ツールにも成り得ます。ICTは、これまでの授業では到達できなかった新しい世界を開く窓と言えるのではないのでしょうか。本県の先生方がICT活用指導力を高め、そして子どもたちがICT活用の先にある新しい世界に向けその扉を開け放つことができるよう、県教育委員会として今後も支援に努めてまいります。

【特別寄稿】

進んで学ぶこどもの育成

ICTの活用による授業づくりを通して



男鹿市立船川第一小学校長

佐藤 和久

(1) 本研究の推進状況

本校では、一人一台のタブレット端末と高速大容量の通信ネットワーク、電子黒板等が整備され、授業支援ソフト「ジャストスマイル」を導入している。また、「学びの保障・充実のための学習者用デジタル教科書実証事業」による生活科と社会科の学習者用デジタル教科書の他、国語科や算数科、理科のデジタル教科書も導入している。さらに、ICT支援員が配置され、環境整備や技術的サポート等、運用面を中心に支援を受けている。

(2) 重点となる主な取組

①個別・協働の学習活動の充実

・算数科を軸とした実践事例と自作教材（動画クリップ、学習シートなど）の蓄積

・デジタル教科書と他ソフトの組合わせ活用

②児童一人一人の学習履歴の可視化

・デジタルポートフォリオと学習履歴の活用

③児童の発達段階に応じた情報活用能力の育成とカリキュラム・マネジメント

・アナログとデジタルの両方で、情報活用能力の系統表を作成

④教員研修の充実

- ・ICTやソフト等の基本操作技能の習得
- ・ICT教育推進アドバイザーとの相談活動
- ③重点となる主な取組の成果◎と課題▲

秋田の探究型授業を進める上で、ICTを活用した方が効果的だと思われる場面を活用するようにした。以下、算数科の実践から。

◎見通しをもつ場面で、授業支援ソフトのデジタルノートに自分の見通しを書いて提出させ、電子黒板に映した。友達の見通しと比較することで自信をもったり、修正したりすることができた。

◎自力解決の場面で、デジタルノートやデジタル教科書を操作しながら何度も試行錯誤して、自分の考えをもつことができた。学び合いの場面では、電子黒板に映した不完全な考えをリレー形式で付け加えながら理解を深めることができた。

▲デジタル教科書に適当な教材がない場合、WordやPowerPoint等を組み合わせて作製したり、ビデオクリップを制作したりしたが教員間で差異が見られる。教材データの蓄積が必要である。

◎生活科や理科、図画工作科、総合的な学習の時間においては、デジタルポートフォリオを蓄積し、単元の終末の振り返りの場面で活用し、自分の変容を感じ取ることができた。

▲算数科においては、ノートの方がすぐ見ることができることから、デジタルポートフォリオを活用する児童があまりいない。

(4) これまでの取組の総括と今後の展望

【総括】

・学習意欲を高める上で、ICTの活用は効果がある。何度もリセットできるため、失敗を怖がらずに挑戦することができ、自力解決の場面では手を止めることなく、前向きに取り組む姿が見られるようになった。

・算数科では、見通し、自力解決、学び合いの場面でICTを効果的に活用できるようになった。他教科等を含め、児童も教員も学習をみんなで創り上げるといったイメージで、授業に臨むようになった。

【今後の展望】

・ICTを活用するよりも具体物を用いた方が分かりやすい児童もいる。自分に合った方法を選択できるように育てていきたい。

・ICTを活用することで「分かった」つもりになっている児童がいる。「本当に分かった」につなぐための工夫が必要である。

・タブレット端末の家庭への持ち帰りを月二回行い、ドリル問題を中心に取り組んでいる。

今後、持ち帰りの頻度や課題内容を検討し、充実を図る必要がある。



◆電子黒板で説明する児童

【特別寄稿】

学校教育における

ICTを活用した取組について



能代市立能代第二中学校長

佐藤 克

コロナ禍、文部科学省のGIGAスクール構想が加速し、生徒一人に一台のタブレット（情報端末）が配られ、電子黒板・通信ネットワーク等の環境整備も進みました。私が採用となった昭和60年。パソコンどころかワープロもコピー機もなく、OHPが最新の教育機器であった時代とは隔世の感があります。

本校は、県教育委員会より「ICTを活用した授業改善支援事業」の指定（本年度より三年間）を受け、研究に取り組んでおり、授業の様子も大きく変化しています。

例えば社会科では、学習課題に対し、生徒がマイタブレットを用いて必要な資料をサーバーやネットから入手。それを基に思考したことを電子ペンでタブレット上のシートに記入し、それを提示しながらグループで協議。更に個のシートを教師用パソコンに各自送信することで全員のシート（縮小版）が電子黒板に映し出されます。その中から特に着目したい考えをピックアップして電子黒板に拡大提示。それを見ながら生徒たちは意見交換し学びを深いものにしていきます。最後は黒板を写真撮影して保存しておき次時に活用、と

いったスタイルが普通に実践されています。体育の跳び箱。タブレットでペア同士互いの演技を撮影し、先生のタブレットから生徒各自に送信された模範演技の画像と比較し、どこをどう改善したらよいか話し合っている様子も見られました。

道徳では、タブレットのポジショニング機能がよく使われています。タブレット画面に表示された線分の両端を「完全肯定」「完全否定」とし、自分の心情は、線分上のどのあたりに位置するかマークします。すると全員のマーク位置が一斉に電子黒板上に表示されます（どのマークが誰のマークかも分かりません）。それを活用して、教師は肯定派、やや肯定派、中立派、否定派など多様な意見を生徒から発表させます。意見交換の途中でも、心情が変化した生徒は自分のマーク位置を動かすなどリアルでダイナミックな授業が展開されています。

研究推進に当たり、校長として教職員に指示したことは、あくまで秋田の探究型授業の構築が目的であり、そのための有効なツールとしてICTを活用していく姿勢です。そして初年度の今年は「まず使う」を合い言葉に実践例を積み上げる中



◆自分の考えをタブレットの資料に書込み、見せ合いがら意見交換（総合的な学習の時間）

で効果的な活用を模索しています。空き時間の先生が、他の先生のICT授業を積極的に参観し、活用の仕方が普通に職員室の話題となっていることは大きな進展だと感じています。

生徒は登校するとすぐに、マイタブレットを充電ボックスから持ち出しスイッチオン。複数の教科で使用し、帰りの会の前に充電ボックスに返却。文房具の一部のようになっています。デジタル世代の生徒はタブレット操作に抵抗はなく、先生方がやり方を生徒に教えてもらう微笑ましい光景も見られます。長期休業中、希望する生徒にはタブレットを自宅に貸し出し、学習支援サイトを使ったり、問題をダウンロードしたりするなどして勉強に役立てています。

研究授業は授業当日より事前研究会にこそ力を入れています。先生方全員を「秋田型探究授業構築チーム」「ICT有効活用チーム」に二分。異なる切り口から検討し深めています。チームの構成員は研究会毎に入れ替え、どちらの資質とも向上させることをねらっています。

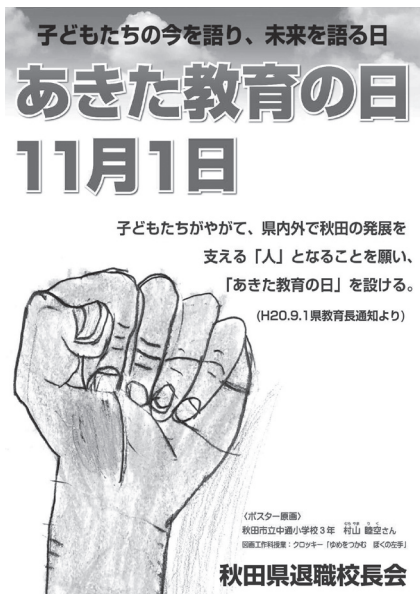
「まず使う」の目標は達成できたと感じています。二年目となる来年度の研究は「どう使うか」といった質的向上にシフトしていきます。特に、学び合いの場面での思考ツールとしての活用が研究の中心となってくると考えています。令和の時代に生きる生徒にとってICT活用は必須。自在に使いこなして問題解決できるようにすることが「生きる力」となります。それを目指して研究推進していきたいと思っています。

「あきた教育の日」の
ポスターが新しくなりました

「あきた教育の日」は、全国連合退職校長会による「教育の日」制定の提唱を受けて、平成17年に「あきた教育の日」制定推進協議会（教育関係34団体）が発足され、平成20年に秋田県教育委員会が制定しました。

「あきた教育の日」は、11月1日ですが、昨年県退職校長会ではこの時期に合わせ、県内の小・中学校長宛てに、ポスターの掲示や制定の意義を児童生徒や保護者の方々、地域の皆様に周知していただきたい旨のお願いをしております。

このたびの「あきた教育の日」のポスターの図案を提供していただいた秋田市立中通小学校3年生の村山陸空さんには、記念品とアールミ額縁に入れたポスターを進呈いたしました。



会員の(ご)逝去 (敬称略) 心からご冥福をお祈りいたします。(97号以降)

氏名 年月日 住所 氏名 年月日 住所

上関 義隆 3・8・8 鹿角市花輪 高橋 勇 3・10・30 秋田市桜ガ丘

中村 重孝 3・10・23 鹿角市十和田大湯 三浦 勝博 3・11・8 秋田市広面

佐藤 博行 3・7・11 大館市東台 佐藤 芳昭 3・12・10 秋田市金足

乳井 昭三 3・7・19 大館市小館花 梅津 嘉弘 4・1・28 秋田市手形

福岡 清 3・8・20 北秋田市綴子 林 洋一 4・2・13 秋田市新屋

佐藤 二郎 3・8・22 北秋田市阿仁根子 武田 三芳 3・7・28 由利本荘市小人町

渡邊 次男 3・10・11 大館市字長倉 佐藤 武 3・12・19 由利本荘市中梵天

佐藤 忠信 3・11・20 大館市有浦 奈良 隆雄 3・7・29 秋田市土崎

田中 昭雄 3・12・8 大館市長木川南 斎藤 郁雄 3・8・5 大仙市大沢郷

伊勢 富雄 3・6・13 八峰町八森 村田 順一 3・8・6 美郷町六郷

武藤 昭治 3・8・18 能代市追分町 奥山 隆三 3・8・11 美郷町六郷

田中 芳夫 3・8・25 能代市鹹渚 高橋 新治 3・8・21 大仙市高梨

神馬 郁朗 3・11・15 能代市檜山 藤澤 淳 3・10・12 美郷町飯詰

(正六位) 工藤 哲弥 3・12・14 八峰町八森 藤田 孝次 3・11・21 大仙市清水

八田 忠雄 3・12・27 八峰町八森 山田 庄市 3・12・1 大仙市横堀

小野 修夫 3・11・27 男鹿市船川港 高橋富美雄 4・1・20 大仙市朝日町

浅野 浩己 4・1・4 男鹿市船越 藤澤 隆史 4・2・3 大仙市太田町

安藤松治郎 4・1・25 男鹿市船川港 伊藤 孝之 4・2・7 大仙市横堀

安藤 貞治 3・7・9 秋田市浜田 齋藤 齊 3・7・5 秋田市東通

秋田 善一 3・8・21 秋田市茨島 千葉 剛道 3・9・17 湯沢市関口

加藤豪之助 3・9・25 秋田市柳田 麻生 悟朗 3・10・19 湯沢市愛宕町

松田 實 3・9・25 秋田市高揚

会員寄稿

じわり生きがい

このひととき

「八十九歳の卓球選手」



鹿角 露 晃

「私の目の前にいるのは、八十九歳の選手。彼はバックハンドが得意。一球目のサーブはロングサーブでくるだろう。気を付けなければ」と思いながら、レシーブの体勢をとる。そして、審判の試合開始の声を聞く。『ラブ・オール』

ラージボール卓球を始めて三年。生活習慣病予防と運動不足解消のために、学生時代を思い出しながら、重い体にむち打って始めた。所属するクラブは、総勢四十一名。平均年齢は約七十二歳。最高齢は九十一歳で私は下から数えて七番目。退職して初めてラケットを握った方もいれば、全国大会出場経験者もいる。膝に人工関節を入れている人もいれば、義眼を目に入れている人もいる。従って、技術レベルはピンからキリまで様々であるが、そこがまたおもしろい。試合になると、誰もが真剣にプレーを楽しんでいる。

一緒に卓球をしながらふと思う。八十九歳

で仲間と一緒に、普通にプレーできることはすごいことだと。卓球歴は約二十年。いくつかの持病を持っているとはいえ、背筋を伸ばし、力強くラケットを振る姿には八十九歳とは思えないパワーを感じる。ミスすると唇を噛んで悔しがり、スマッシュが決まるとガッツポーズをとる。まさに体いっぱい卓球を楽しんでいる。八十九歳は言う。「卓球は私の生き甲斐、もつと上手になりたい」と。夏の練習の時には、休憩時に塩分補給にと塩飴を一個くれる。その優しさがまた嬉しい。

八十九歳までは、自分は後二十二年。果たして同じぐらいの年齢まで続けられるかどうか分からないが、気持ちだけは大先輩に負けないよう、常備薬を片手に、健康を第一と考え、一日二時間・週二回の卓球を、これからも精一杯楽しんでいきたい。

(平成二十七年三月退職)

「自ら行動を起こす」



大館北秋田 佐藤 洋子

亡き義父母が残した畑を荒れ地にするのは忍びないと、退職前から始めた野菜作りを続けている。はあはあ言いながら、鍬を振り下ろすのは結構重労働だが、高めの血糖値を下げる有酸素運動になる。知識と経験に乏しい

ため失敗は多いものの、予想外によく育つものもある。昨年は粒の大きい落花生がたくさん採れた。在職時、地域の方から種をいただいたのをきつけに育て始めた。畑の落花生を見て、この作物は何かと尋ねられた方に、収穫後茹でた落花生を少し差し上げた。「すごくおいしかったので、来年植えてみたい。」と言われて嬉しかった。

退職した年は、夫と県内の道の駅巡りをした。ほとんど足を運ぶことがなかった県南を中心に回り、産地直売コーナーで野菜や特産品を買うのが楽しかった。鳥海から雄勝の道の駅に向かう途中、湯沢市院内を通った。高校生の頃、毎日大館駅から院内行き列車に乗って帰宅していたながら、院内がどこか分からなかった。「院内」の文字を目にした途端、遠い高校時代の思い出が蘇った。

主婦をしながら、一年以上自由な生活をしてきたところへ、適応指導教室指導員の話があった。週四日働き続ける気力は、最早失せていた。それでもやると決心した最大の理由は、指導員としての未知の日々に、興味をもったからだ。実際やってみたら、仕事の難しさを思い知らされ、迷い悩む日々の連続。しかし、新たな出会いがあり、学んだこともたくさんあった。

退職して早三年。どんなことであれ、自ら行動を起こしやってみる大切さを実感した三年間であった。

(平成三十一年三月退職)

「ランニング継続中」



能代市山本郡

工藤 克也

走行距離は約二万一千キロ——。脱メタボを期して始めたランニングだが、二十五年目にして地球を半周以上走った計算になる。自分ながらよく続いていると思う。

現職の頃は、勤務に支障のない範囲で近県開催の五キロや十キロの大会に参加していた。が、退職の年に思い切ってホノルルマラソン二〇一三に単身で参加した。午前五時のスタートを告げる花火と大歓声、ダイヤモンドヘッドの夜明け、刺すような日差しと暑さ、終盤に立ちほだかる坂道の辛さ、そして完走の感激は、今でも鮮明に覚えている。

その後は、ハーフやフルマラソンへの大会参加をメインに、「走る楽しさ、走れる喜び、苦しさを乗り越えた完走の達成感と冷えたビール」を存分に味わうことができた。退職を機に大会遠征に同行するようになった妻も、温泉地や観光巡りを楽しんでくれた。

ところが、コロナ禍で状況が一変する。大会は全部中止、それどころか、人混みを避けステイホームの日々が続くことになる。

幸い、自宅周辺でのランニングには支障がなかったため、この二年間は「ゆっくり、景色を楽しみながら走る」ことでモチベーションを保ってきた。県北最大のショッピング

モールや国内最大手の木材会社の工事の進捗状況チェックも楽しみの一つだった。また、米代河口に沈む四季の夕焼けをスマホで撮るのは格別だった。時には、堤防で狸や狐、雉に遭遇することもあった。

今年は、待ちに待ったマラソン大会の開催通知が届くようになった。感染予防に細心の注意を払いながら、「無理なく」ランニングを続けたいと思っている。

(平成二十五年三月退職)

「ハッケヨイ！
相撲にはまってる」

男鹿市

中田 博道

この三月末で教職員生活に終止符を打つことになりましたが、ほぼ同じ時期に相撲に関わり、こちらは今後もまだ続きそうです。

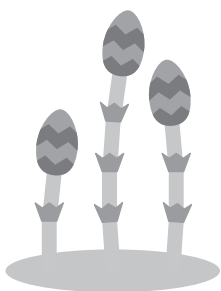
私は相撲が大好きで、卒業論文で相撲をテーマにしたほどです。そのため初任の天王小学校で相撲部監督を任せられたのを皮切りに異動先でも相撲指導にあたりました。土俵上で繰り広げられる様々なドラマが時には大きな感動を与えてくれるのです。教室では見えない姿を発見することもあります。ちびっこ選手が厳しい練習をこなし、数年後には別人のように成長する姿を見せることもあり、

それを実感できる喜びを味わえることがまた相撲に携わる理由の一つかもしれません。

現在、私は秋田県相撲連盟の一員として、県内外の各種相撲大会の運営に関与しています。中でも十五年前に行われた、「秋田わか杉国体相撲競技」で主審を務めさせていただいたことは忘れられない思い出です。国体の主審は十人くらいで交代しながら務めるのですが、さすがに全国規模の大会になると独特の雰囲気がありました。大会三日目、三笠宮瑤子女王殿下がご観戦の中、誰が主審を務めるのか主審の間で話題になりました。審判割とご観戦の時間を見てみると、なんだか自分の番のような気配がしました。予感的中し、異様な雰囲気の中で私が土俵に上がって裁いていたのは忘れられない思い出です。

このほか全国学生相撲選手権大会で主審をしていた時にある選手のまわしが外れるハプニングもありました。さすがに慌てました。緊張感あり、笑いあり。いつの間にか相撲にはまり、これが私の生きがいになっていることに気が付いてきた今日この頃です。

(平成三十一年三月退職)



「研修登山から」



秋田市

黒澤 薫

標高一一七〇mの太平山奥岳に登った。標高はさほどあるわけではないが、古くからの信仰の山でもあり、修行のごとくなかなか厳しい山である。四十五年ぶりに、旭又から挑戦した。体重がいつの間にか三桁になっていたこともあり、自分の体を一步一步進めていく度に、心臓が爆発するのではないかと思われるほど激しく鼓動していた。第二の職場に就いてすぐの現場研修登山である。それまでの不摂生を直に感じた。

この職員研修登山のねらいは、年間数回ある登山の現地下見を兼ねている。さらに、新任者への登山への向き合い方は体験を通して学ばせる機会にもなっている。前述のとおり、自分は自身の登山で精一杯だが、この研修の企画と指導役の現職職員の、参加者へのサポートと支援の配慮を、身をもって学ぶことができた。安全の確保や登山者の心情や体調管理への配慮、計画の柔軟な変更など、主催する側としての必要事項を学んだ有意義な一日研修だった。

日本三百名山など全国各地には様々な表情をしている山がある。太平山もその一座である。今の夢はいつか上高地から登り、涸沢カールで紅葉を眺めることである。あんなにつら

くたいへんな山登りでも、また行きたくなるのだから、つらさ以上の感動や喜び、満足感がそうさせているのだろう。

自分のライフステージに合わせた自然とのかかわり方を考え、より幅広く楽しんでいきたいと思う。どうにか体重は二桁までに戻っている。雄大な自然の中で、ゆったりとコーヒーの香りを楽しむことが、ちょっとした贅沢かもしれない。

(令和二年三月退職)

「継続こそが修行の道」



由利本荘市・にかほ

小島 弥恵子

「書道は趣味？というより修行だよね。」と仲間と慰め合いつつ二十数年。今だひよつ子です。しかし、このコロナ禍で、することがある行く所があると、書が続けてきてよかったです。としみじみ思いました。

お世話になつて由利本荘市の『清芽会』では、所属する『白峰社』からの課題によって漢字や仮名などを学んでいます。二千年前の中国の大書家の筆法を学んだり、千年前の平安時代の優雅な仮名の世界を臨書したりとその奥深さに触れることができて幸せです。

また、「近代詩文書」という詩や和歌、俳

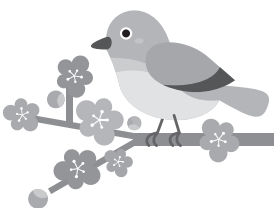
句などを書作品に表現するジャンルにも参加し、社中展や全国展に出品することもあります。これは技術と共に芸術性が要求され、大変難しく道は遠いと毎回思います。センスがないからと言い訳したくなりますが、『センスとは色々な作品を見て自分を磨くもの』との偉い先生の言葉に返す言葉はなく、これが修行にたとえる所以です。

それでも苦しくも楽しく続けられる訳は、一つは毎月クリアすべき目標や課題があること、二つ目は自己表現した作品を見ていただける発表の場があること、三つ目は、すばらしい指導の先生方と書友に恵まれていることです。退職校長会の会員や同僚、様々な職業と両立させながら長く書の道を歩んでこられた尊敬すべき方々です。

私は退職後四年間市教育研究所に勤務後、家におりますが、年月の経過があまりに速く少しでも元気なうちに挑戦しなければ後はないと思うようになりました。凡人は継続こそが修行の道と心得、墨を磨るこのごろです。

最後に、祝「書道」無形文化財登録！

(平成二十七年三月退職)



「夢の中で」



大曲仙北

藤 本 竜 伸

皆さんはどうでしょうか。退職後の私は、睡眠中に夢を見ることが多くなりました。

これも職業病といえるのでしょうか。夢の内容は、圧倒的に学校に関することが多いのです。教室内がざわついて授業がなかなか進まないことに焦りを感じている夢もあります。

授業の準備ができていないまま授業参観日を迎えたり、三日後に学習発表会を控えているのに劇が完成していなかったり……。トイレに行きたいのを我慢して寝ていると、トイレを探す場面がよく出てきます。心理学的にはどうなのでしょう。一度も見たことのない校舎の中で、教え子たちとの学園ドラマが続編で展開したりするのですから、不思議なものです。昨夜は、数学の講義を受けている夢でしたが、問題を解けない苦しみを久しぶりに味わいました。そんな夢を見ると、目覚めた後でも心が静まらず、焦りや苦しみがちよっぴり胸に残っていて痛みます。

しかし、ある時気付いたのです。悪夢にうなされようとも、夢の中では教え子たちに再会できることを。亡くなった祖父母と話をしたり、幼い息子たちの手を握って一緒に歩いたりすることができるよう。友人や先輩、後輩と飲み会をすることもできる。夢の中では、現

実にはできないことも可能です。身体がふわりと浮いて、空を飛ぶ夢は爽快でした。私の場合、午後九時までにベッドに入ると、睡眠の満足度が高く、映画のような様々な夢の世界に浸ることができることも分かりました。やがて永遠の眠りにつくまで、何編の夢を見ることもできるのでしょうか。目覚めている時間の生きがいもありますが、今夜は誰に再会できるのか楽しみにしているのです。

(平成三十年三月退職)

「澄んだ青空の下で」



横手市

藤 峯 千代美

(現在仙台市)

まもなく退職してまる五年。長く住み慣れた横手市から、長男が住む宮城県仙台市に移住して三年目を迎える。

仙台市は、大都会のイメージがあつたが、いざ住んでみると地元の方が言うように、「ほどよく都会、ほどよく田舎」正にその通りである。病院、買い物、交通網など都会での便利な生活とともに、すぐ近くに海や山があり自然公園も多い。

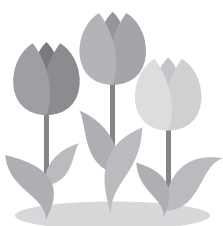
気候も穏やかで、雪や猛暑に悩まされる心配はほとんどなく暮らしやすい街である。特に冬は、晴れる日が多く、澄んだ青空をまるで当たり前のように見ることができる。

未だにコロナ禍による自粛生活が続く中にも、澄んだ青空を見ていると心が穏やかになり、自然に前向きな気持ちになる。毎朝の散歩だけでなく、一日何度でも出かけたくなってしまう。青空の下で、元気に遊ぶ幼児や楽しそうに語り合いながら下校する児童・生徒の姿を見ると、何かほっとした気分にもなる。正直なところ、私は、コロナ禍によるストレスだけでなく、ふるさとを離れ、お世話になった方々に何の恩返しもできずに疎遠になっっていることへの後ろめたさに苛まれていた。

そんな私を救ってくれたのが仙台の澄んだ青空である。気が滅入っていても、空を見上げるだけでいつの間にか、「いずれきつと恩返しできる日が来る」そんな気持ちになり、心も体も軽くなっていく。青空に感謝である。今日も朝から澄んだ青空が広がっている。遠くには蔵王連峰も見える。断捨離継続中の私は、その光景を眺めながら、今日もがんばろうと心を躍らせている。

ちなみに、無類の読書好きである妻は、その傍ら自分史作りにも取り組んでいる。

(平成二十九年三月退職)



「雪に遊んで 冬を元気に」



湯沢雄勝

大山 裕一郎

改めて自分の生きがいとはと自問すると、体を動かすこととでもいえるべきか。子供の頃からじっとしていることが苦手で、落ち着かないと言われた。救いは、活動的な面が運動好きにつながり、東京五輪に刺激を受け、将来の職業観にまで繋がったこと。私にとって活動欲求を満たす延長線上に保体科教員という道があったのは、実に幸せなことであった。

退職後は、畑仕事やウォーキングにスポーツにと、動き回りながら自由を楽しむ日々である。そんな行動特性を生かしつつ、退職後に子供たちへのボランティアとして唯一継続しているのが、居住学区の小中学校におけるスキー授業の手伝いである。わずかに年に十数回の機会だが、毎日スキー場に出かける私にとって、スキーボランティアはそのフィードにあり、一石二鳥と言える活動である。

かなり昔になるが「雪に鍛えて冬を明るく」という冬季国体のスローガンがあった。私の活動にはぴったりだが、一般的にはウィンタースポーツ離れが叫ばれて久しい。子どもがテレビやゲーム機の前で冬を過ごす姿は健康的とはいえない。本県の人口減少の一因として積雪寒冷ということがあるとすれば、なおさらスキーを始めウィンタースポーツの

おめでとうございます

(順不同・敬称略)

祝 叙 勲

氏名	現住所	功 勞	種 類	受章日
三浦 多加稔	北秋田市小又	高齢者叙勲	瑞宝 双光章	3・9・1
伊藤 保之	北秋田市栄	高齢者叙勲	瑞宝 双光章	4・1・1
石嶋 芳人	八峰町八森	高齢者叙勲	瑞宝 双光章	3・9・1
夏井 光彦	能代市字一本木	教育功勞	瑞宝 双光章	3・11・3
岡 強三	大仙市北櫛岡	教育功勞	瑞宝 双光章	3・11・3

良さを味わわせたと思う。十九歳・二十歳へのリフト代無料や半額割引は素晴らしいアイデアであるし、小学生以下リフト無料のスキー場もある。大人を引っ張り出したいという戦略は透けて見えても、それに乗るのは悪くない。さしずめ高齢者は孫の世話ができ、時には加齢と共に失いがちな存在感を回復できるかも知れない。子供たちの「明日への自在なシユプール」に役立てばと今日もゲレンデへ。

(平成二十五年三月退職)



【あとがき】

会報98号をお届けする頃はコロナウイルスワクチンの三回目接種が順調に進んでいるでしょうか。安心して過ごせる日常生活を一日も早く取り戻したいものです。

今年度も、本会の事業である総会や研修会のほとんどが延期や中止となったため、会報の構成内容の一部変更しております。

本号では「学校教育におけるICTの活用」をテーマに特集を企画しました。

おかげさまで、今後、ICTの活用によって学校教育がどう変わっていくのか、示唆に富む貴重なご提言をいただくとともに積極的に取り組んでいる教育現場の様子が良く分かりました。

お忙しいところ執筆やご協力いただいた皆様に感謝申し上げます。